
マジックワールド。魔法の世界へようこそ

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

【著者名】

ZZマーク

【作者名】 ケン

【あらすじ】

これは突然、魔法の世界に來てしまった少年、如月集の波乱万丈な物語である。

プロローグ

「は～最悪。理科の点数が50点つてやばいわ～」
一人の学生服を着た少年が悲壮感を漂わせながら歩いていた。
彼の名は如月 集きぬづき しゅう

とある高校に通う高校一年生である。
ちなみに今日は考查返却日であり
全教科が帰ってくるという地獄の日であった。

「は～余裕ぶつこいてたらまさかの計算ミスで
十点落とすとかほんまないわ～しかも
数？も計算ミスで十五点落とすし、ほんま最悪」
しかし少年の顔はそんなに気にしていなような顔だった。
「ま、いつか。興味無いし」

この少年はある出来事により物事全てに興味が
消え失せ氣分で物事をこなし、
勉強も良い点を取つたら親が喜ぶので
頑張るという事だった。

とは言つてももうその親も去年に事故死した。

「・・・・・帰ろ」

「ただいま～って言つても誰もいないから言つても意味ないか」

集はブレザーをかけて制服のままでベッドに横たわった。

さらにこの家の家賃は破格で借りる人が相次いだが

借りた人は全員1か月も経たずに引っ越ししたという

曰くつわの一室だった。

「はーしょもないな~この世界。何かいいこと無いかな~いや、それよりも今の生活は普通すぎるから刺激がほしいな。例えば・・・・このまま寝て起きたら別の世界にいたりとか~良いな、それ!・・・・な事ねえか。寝よ寝よ~」

集はそのまま目を開けじ10分後には熟睡してしまった。

自分の言っていたことが現実になるとも知らずに。

プロローグ（後書き）

こんばんわ。初めまして。ケンと申します。
一次創作を書くのは初めてです。
今まで二次創作をやってきましたので。
これから、よろしくお願ひいたします。

第1話　目が覚めたら魔法の世界！？

「ん~今何時だ？」

集が時計を探そうと手を動かすがその時計が見当たらなかつた。
「ん? 何でないんだ? それにこの感触……草か?」

不思議に思い目を開けると……

「な、何ここ」

周りは草ばっかりで集の部屋ではなかつた。

「ここどこ? ……まあ、いつか。

興味無いしな。一回散策するかな」

集は一旦、周りを散策する事にした。

「ほんとなんなん?」

散策してみたがあまり情報は得られなかつた。

すると後ろに何かの気配がして振り向いてみると

「・・・・・」

よく絶世の美少女を見ると目が離せないと

クラスメイトが言つていたがその事がようやく

分かつた。その姿は赤い服に黒いマントを

はおり腰には刀を差しており

髪の毛は肩にピッタリと切りそれられていて
なお且つきれいな黒髪だった。

「あ、あの少♂」

集が言いかけた時突然、その少女は刀を抜き
切りかかって來た。

「ひつ！」

集は慌てて横に避けるとその刀は切り返され首に向かつてきた。

「うわああああ！」

集は恐怖のあまり腰を抜かしてへたり込んでしまった。

そのお陰で何とか刀は髪の毛を少し掠るぐらいで避けられた。

「……！」

その少女は驚いたような顔をしたがすぐさま冷静になり集に向けて刀を振り下ろそうとするが

「…………」

集と目が合い数秒固まつた後に刀を下ろした。

「は、はは。よ、良かつた」

「すまない。どうやら君は違つたようだ」

「え、何が？」

「いや何もない。立てるか？」

「ん~無理ですね。手を貸してくれませんか？」

「ああ、良いとも」

「すみません」

集が少女の手に触れた瞬間、集の頭に映像がよぎつた。

『…………か？』

『…………さ。…………ず…………る』

「な、何これ？何で女の子が泣いてる？」

「何でそんなに悲しそうな顔をしてるんだ！」

その映像は画質が粗く音も

割れすぎていてほとんど聞こえなかつた。

「大丈夫か？」

「え？あれ？」

先程の映像が急に消え普通の景色に戻つた。

「あ、ああ大丈夫です」

「そりが、すまないな。急に襲つたりして」

「い、いえ別にそんな」

「所で君はどこの者だい？あまり見ない顔だが」

「へ？どこの日本人ですか？」

「二ホンジン？そんな国あつたか？」

「は？いや日本ですよ？日本」

「何を言つてるんだ君は？二ホンジンだと二ホン

だとが不思議な言葉を使つてゐるが」

「す、すみませんがここはどこで、何で言つ場所ですか？」

「何を言つてるんだ？ここはコートリスで

この地域一帯はコラリスではないか。

本当に大丈夫か？」

集は困惑していた。何せ聞いたこともない地名が出ていたのである。

「コートリス？コラリス？何じゃそりや。・・・・

ま、いつか。向こうの世界も飽き飽きしてきたし。

ここは受け入れるか」

「す、すみません。最近ここに来たもので」

「ふむ、そうか・・・所で名は？」

「ああ、そうでしたね。僕の名は

如月集つて言います。貴方は？」

「私は桜ゆえだ。よろしく頼む」

「はい！」

お互に握手を交わした。

「ひとまずはその格好を何とかしないとな」

「へ？あ」

よく見ると集の制服は土だらけで元の色が見えてなかつた。

「私の家に行こう。すぐ近くだからな」

「ええ、分かりました」

森を出るとそこにはたくさんの露店が立つており

人々の活気の言い声が聞こえてきた。

「あ、どうだい！ その奥さん！ このネックレスきれいだろ？」

「おばちゃん！ 頂戴！」

「へ～結構広いんですね」

「まあな。ここはこの地域では一番規模が大きいマーケットだからな。所で君はどこからきたんだ？」

「え、え～っとですね。まあ、遠い所から」

「そうか、長旅で疲れて寝てしまつたのか？」

「ははは！ ！ そなんですよ！」

「ならば宿にでも泊まれば良かつたものを」

「じ、実は今お金が一文無し何です」

「一文無しとは何だ？」

「しまつた！ ここは日本じゃないから

ことわざとかも知らないんだった」

「あ、いや僕の国の決まり文句でしてね。

お金が全くない事を言うんですよ」

「ほ～初めて知つたな。今度詳しく教えてくれないか？」

「え、ええまあ」

「うむ。約束だぞ！」

ゆえはとてもきれいな満面の笑みで集に笑つた。

「はい！」

集も満面の笑みで笑い返した。

「ここが私の家だ」

「へ～結構大きいんですね」

「ふふ、まだ小さい方だぞ？」

そこには結構大きめの家が建つていた。

広い庭がありきれいな花や木々がたくさん生い茂つっていた。

「あら、ゆえちゃん。御帰りなさい。

その隣の男の子は？」

「ああ、紹介するよ。」の子はさつき森であった

旅人の如月集だ。それでこっちが私の母だ」

「はじめまして。如月集と申します」

「ふふ、そんなにかしこまらなくても良いわよ？

私はゆえちゃんの母の桜ゆいで～す。

よろしくね～集君」

「はい、よろしくお願ひします」

「ま、ひとまず中に入るうづか」

「あ、はい」

「上がつて頂戴」

ひと先ず集は客室に案内された。

「ひと先ず集。体を流してきたらどうだ？」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「そんなに畏まらなくていいぞ？」

「え、あじやあ、分かった」

「ああ。シャワー室はそこを右に曲がった突き当りだ。タオルなどは後で持つて行くよ」

「ああ、ありがとう」

「覚悟はしていたけどお風呂じゃないか～」

集が入った場所はお風呂ではなくただ単にだだつ広いシャワーだけの浴室みたいなものだった。

そこで、集は一応体を洗い貸してくれたタオルを使い、服も借りた。

「ああ、上がつたのか。集」

「ああ、ありがとう。さっぱりしたよ」

「まあ、座れ」

「うん」

「ではまずは君の話を詳しく聞かせてもらおうか?」

「へ?何の事?」

「惚けない方がいい。私の勘は良い方でな。」

君は「この・・・いやこの世界の人間じゃないんだろう?」

「! ! ! ! !」

「図星か」

「うん」

「話してくれないか?何か力になれるかもしねー」

「分かった。話すよ」

それから集は今までの事を話した。

自分は異世界から来た者で日本という国の事など

10

「そうか。つまり君は異世界から来たという事で良いかな」

「うん。ま、気にしてないけど」

「元の世界に戻りたくないのか?」

「何で?」

「何でって君が今まで過ごしてきた世界なんだぞ?」

そして突然目を覚ましたら異世界つて怖くないのか?」

「興味無いね」

「何?」

「僕は別にどうなりうが興味無いよ。そこで起きたことに關しては僕は全部無条件で受け入れるからな」

「・・・・何があつたんだ?」

「・・・何もなかつたよ。何もね」

そういう集の目は悲しそうな顔をしていた。

「やう言えば集はこんななのを見た事はあるか?」

「ん？」

するとゆえが突然、手のひらから炎を出した。

「…………へ～」

「むむ？ 感動すると思つたんだがな。これも興味無いのか？」

「ああ、無いね。全く」

「そう言いながらもお前、ガン身だぞ？」

集は炎を近くでまじまじと見ていた。

「…………凄いな。僕にも出来んのか？」

「分からないな。君はこの世界の住人ではないからな。この世界では幼い頃からこれを勉強してるらな」

「それって魔法なのか？」

「ああ、魔法だよ」

「…………教科書あるか？」

「ああ、あるがどうするのだ？」

「見せてくれ！！俺もマスターしたい！」

その日はきらきらしていた。

「い、良いぞ。後ろの書庫に大量にあるから見ていいぞ」「よーし！」

そう言い集はダッシュで書庫に向かつた。

「あら？ 集君は？」

「集なら書庫に行つたよ」

「あらそつ。折角おいしいパンを作つたのに」

「まあ、後で分からなくなつて出でくるや。その時に食べさせよう」

「そうね」

そして夜～

「お～い。集、大丈夫か～入るぞ～」

ゆえが入るとそこには・・・

「何をしてるんだ？」

「・・・本の海で泳いでる」

本の山に埋もれた集がいた。

「それよりも晩御飯だぞ」

「ああ、悪いな」

集はゆえに連れられ晩ご飯を食べ

また書庫にこもり一日を過ごした。

第1話　目が覚めたら魔法の世界ー? (後書き)

こんばんわ。連続更新です。
如何でしたか?
感想もお待ちしております。
それでは、ちよなら

第2話 目覚めの時 Wake up!!!

「ん~いい朝だ。さてと起きるく

ゆえが起きようとした時、庭で大爆発が起こった。

「な、何だ!?」

「ご無事ですか!? お嬢様!!!」

「ああ、私は大丈夫だが何が起こつたんだ?」

ゆえが執事に尋ねた。

「分かりません! 庭の方であつたみたいですが

「私が行く」

「・・・・お気をつけて」

「ああ

ゆえは黒いマントをはおり刀を持つて庭に出た。

ゆえが見たページには賢者クラスと書いてありそこには炎の最大魔法が記されていた。

「流石に最大魔法はきついな」

「集。君はどちらしたんだ？」

「それだけど？」

「は、死ぬ気か。まずは初級魔法からだらう」

「ああ、そうだな。よしーいくぜー！」

集が手のひらを返すと炎が出たことには出たが音だけがデカイ音爆弾みたいな魔法だった。

「うおーー！」

「ふむ。炎はダメと、よしけだ！」

「お、おうー次は水だ！」

もう一度出すと今度は大洪水のような大量の水が溢れ出しゆえに直撃した。

「ぶつ！」

「あ、わ、悪い。ゆえ。だいじょう・・・・・ぶ・・・・か？」

ゆえは怒ったかのように体から炎を出し水分を飛ばしていた。

「次だ」

「は、はい」

低い声で脅された。

「つ、次は」

「君はある意味凄いな」

「・・・・・・・」

ゆえの真下にはぼろぼろになつた集がいた。

「雷を出せば感電し、自然を使えばつるが自らを縛り無機を使えばがらくたが出て、肉体強化を使えば豚みたいなデブになつた」

「仰る通りです」

「つまり君は今のところはどの属にも属してはいない」

「でも、まだ属はあるぞ」

「闇と氷だな。だが闇に関しては魔族のみが使え

氷に関しては机上の空論だ」

「あ～最悪だ～」

「集よ」

「何～？」

「学校に行つてみてはどうだ？」

「は？ 学校？」

「ああ、そうだ。学校に行けば詳しい原理などが学べるぞ」

「でも、俺が行けるのか？」

「どうしてだ？ 行きたくないのか？」

「そりや行きたいけど学費とかがだな」

「ああ、それなら大丈夫だ」

「何で？」

「私の父は騎士隊の隊長だからな」

「騎士隊って？」

「騎士隊とはその名の通り民間を護るために結成された。

その騎士隊はどの人物も名だたる魔法使いがいるんだ」

「ふ～ん。興味無いな」

「まあ、良い。それでどうする？ 行くか行かないか」

「……行く」

「よし！ ならばさっそく準備に取り掛かるつー！」

それからは忙しかった。

まずはゆえの父に了承を得るために会つたり
服を取りそろえたり等など色々な事をした。
そして……

「ふああああ～」

「おいおい、本当に受験生か？ 集」

ゆえと集は学校の前にいた。

「ここ」が

「そうだ。ここが私が通つてる
シルバロン魔法高等学校だ！！」

そこには真っ白な建物に闘技場のようなもの。
それに寮の様なものやさらにはお店までが完備されていた。
すると二人の前に一人の女性が突然現れた。

「うお！！」

「はじめまして。貴方が如月集君ね？」

「はい」

「私は今日一日貴方の試験官を務める
フィーリ・ブリュッセルだ」

「よろしくお願いいたします」

「ああ、よろしく頼む。早速会場に行こうか。
桜さんも来るが良い」

「はい！」

二人はフィーリに連れられて試験会場に案内された。

「まずは今日一日の日程を説明する。

まず、この編入試験は一日を通して行われる。

まずは一次試験の筆記テスト。次に

二次試験の身体能力を計るフィジカルテスト。

最後に魔法戦闘を見る実技試験だ。質問は無いかな？」

「はい」

「よし、なら始めよう」

「がんばれよ！集」

「ああ、任せろ」

こつして集のテストは始まった。

一次試験：筆記テスト

「結構難しいな。でも、基本を応用してあるだけだから解けない事は無い」

二次試験：ファイジカルテスト

「このテストでは攻撃魔法を避けてもらつぞ。
自分の魔法は無しだ」

「了解」

「では、始めるぞ！！」

合図とともに次々と魔法が放たれた。
炎の玉や雷の弓の様なもの、
水を周りに敷いて雷を全体に通すものなど
ハイレベルな攻撃が行われた。

「はい。そこまで一次でラストよ...
と言いたいけど昼休憩よ」

「りょ、了解」

（休憩室）

「お疲れさまだな。集」

「ああ」

「しかし貴様は避けるのだけはピカイチだな」「どうか？」

「ああ。こここの入試試験はかなり厳しいものだ。
そして編入試験はさらに厳しいものだと言わている。
私もやつたが一回は当たつてしまつたぞ」「偶然だよ。偶然。じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ、行つて来い！！」

「お疲れ様。これで最後よ」

「はい」

「内容は私と全力勝負よ」

「了解」

「さつきの試験でこの人の攻撃は
大体読めた。あとは」

「言つとくけどさつきの試験の魔法はかなり手加減したから
「！」

「本気で来ないと」

フィーリは手に炎を纏わせ地面を殴つた。

すると…

「ま、まじで？」

地面が大きくへこんだ。

先程の試験では全く傷すらつかなかつたものが。

「死んじゃうわよ？」

「ひい！！」

最終試験が始まつた。

別室

別室でゆえが二人の勝負を観戦していた。

しかし、その内容はフィーリが圧倒的に有利な状況だつた。
「まずいな。今の集はまだ魔法をキチンと使っていない。
それに自分にあつたものも未だに分からない」
ゆえが考へていると後ろから何人かの人物がやつて來た。

「お～お～やつてるやつてる」

「珍しいな。貴様らが見に来るとは」

そこには5人の少女と1人の少年がいた。

「別に良いでしょ？私達も見に来たいときもあるわよ」
金髪で露出度がかなりきわどい少女が話した。

「いい加減貴様のその破廉恥な服はやめる。田に毒だ」
「あら。これでもスタイルは抜群よ」「
金髪の少女が言うとおり腰はかなりくびれており
胸もかなり大きく顔も整つており
軽く化粧をしていた。

「ゆえ……正解……貴方……凄く……破廉恥」

「貴様も貴様だがな」

今喋った少女は緑色の髪の毛に
身長は少し低めできれいというより
可愛いという言葉がぴったりだった。

「彼……噂……人物」

「ああ、そうだ。彼は」

ゆえが言いかけた時少年が口をはさんだ。

「如月集。生年月日・身長・体重・年齢と共に
不明な少年だ。おれでも名前しかわからなかつた」
「へゝこの国一の情報通と謳われるあんたでさえ
分からぬなんてね。ミステリアスで良いじゃない」

少年は服にかなりのチヨーンを巻きつかせ動くたびに
じゅらじゅら言っていた。

もう一人の少女は青い髪の毛をしていた。

「……」

何もしゃべらない少女は黒髪で腰ぐらいまでの
長さの髪をしていた。

「なあ、何であいつ魔法使わねえの？」

「私…不明…回答…要求」

「ああ、集は、そのだな」

「魔法が使えない、いやまだ眠っているのか」

「――――――――――」

その場の空気が一気にピリピリしたものに変わった。

「へ～貴方が来るなんてね。今日は大雨の日かしら～。」

「悪いが俺は雨男ではない」

この少年は髪の色が6色に分かれていた。

「何故その事を？」

「何となくだ。貴様らも感じていいんだろ？未だ感じたことのない気配を」

「――――――――――」

「まあ、その内、面白くなるわ」

21

「はあ、はあ」

「どうして魔法を使わないの？」

「さあね」

「余裕をこいでる訳でもなさそうね。

まあ、良いわ。これでフィーリシゴよ――」

フィーリは左右の手から炎を出した。

「ねえ、知ってるかしら？水を急に熱するとどうなるの？」

「水蒸気となり氣化されるだろ？」

「そつ。でもその水蒸気って結構

「――――――」

「気付いたよね。でも、遅いわ」

フィーリは巨大な爆発起こし一気に水を氣化させかなりの熱を持つた水蒸気を発生させた。

「集！！」

その光景を彼女たちも見ていた。

「あ～あ。残念。フィーリ先生の得意技来た」

「あれは未だに完全に防げる気がしないぜ」

「私…同感」

「終わったわね。帰ろうかな」

三人の少女達が帰ろうとした時

「待て。これからだ」

「――?????」

「さあ、見せてみる。お前の魔法を」

「あひや～やりすきちやつたかしり～」

フィーリはのんきに考えていた。

「でも、これである子は…??」

突然フィーリの体が震えた。

「寒…！それに息が白くなるほど気温が下がってる

……まさか、彼がこれを…?

フィーリは集を見てみるとそこには

「う、嘘でしょ」

巨大な氷がそこにあった。

第2話 目覚めの時 Wake up---! (後書き)

おはようございます！！ケンです！！
如何でしたか？

今日確認したらアクセス数がまさかの14でした。
確認したとき、まじで？と思いました。
まあ、二次創作とは違つて一次創作は
ヒットしにくいですからね～
感想もお待ちしております！！
それでは～

第3話 全てを凍らす者

「……は？」

集は浮遊感を感じていると

頭の中に声が響いてきた。

『ふむ、貴様が呼んだのか？』

『誰？』

『私は氷の魔法の……まあ何だ、そついつ事だ』

『全く分からんんだけど？』

『つべこべ言うな。で？どうする？』

『何が？』

『貴様は氷魔法の力が欲しいか？』

『氷？氷魔法は確か机上の空論だけ？』

『違うな。その昔大きな魔法戦争があった事は知っているだろ？』

『うん、まあ？』

『そこでその戦争を止めた英雄はだれだ？』

『確かに炎、雷、水、闇、無機、自然の魔法使いじゃなかつたけ？』

『そうだ。だがそれは口伝え故に一つ消えた属性がある』

『それが氷？』

『そうだ。さあ、どうする？このまま死ぬか
奴を倒し合格するか……選択するんだ！！』

『僕は……合格するんだ！！合格してこの世界で
楽しく過ごすんだ！！だから力を……』

『良いだろ？！』

「……」

「あいつ何をしたんだ？」

「氷の魔法は存在しないんでしょ？」

「……」

「不明… 実際… 目の前… 起こつてる」

「見ろ！氷が碎けるぞ！」

ゆえが叫ぶとともに氷が砕け現れたのは…

「集なのか？」

白い髪の毛に変化した集が立っていた。

「そ、そんな氷の魔法は存在しないんじゃ…」

「…凍れ」

集が地面を蹴ると共に辺り一帯が凍り始めた。

「ああ、もう…！」

フイーリは自然の魔法で大木を出現させそれを足場にして空中に飛び上がった。

「空気は凍らせられないでしょ…！」

「ふん、なめんなよ」

集の足もどが凍りだし氷柱となり一気に伸びて近づいた。

「う、嘘…！」

「空中では動けないよね？」

集が空気を叩くように振舞うとフイーリを巻き込み凍つた。

「どうだ？」

しかし、氷が突然割れ一人の男が現れた。

「ん？ 貴方は？」

そこには六色の髪の色をしている少年がいた。

「すまないな。割り込む気はなかつたんだが今の君は危険すぎるため、割り込ませてもらつた」

「じゃ、じゃあ試験は？」

「合格でよろしいですね？ フイーリ先生」

「ええ、文句の言いようがなく合格よ」

「よっしゃーーー！」

喜んだ瞬間、集は氣を失つてしまつた。

「ん？」こは

「目が覚めたか、集」

目の前にゆえがいた。

「うん、でもここは？」

「ここは」

「ここは保健室よ！！」

「？」

「？」

後ろからドアが蹴り破られたかと思いつと五人の少女が出てきた。

「え、えつと誰？」

「ああ、紹介しよう。まずは破廉恥娘だ」

「誰が破廉恥娘よ！！私の名はライカ・サイトよ！！

ライカで良いわよ！」

「は、はあ」

「じゃあ、次は私ね？

私は水識ラナよ？ラナで良いよ？」

「ど、どうも」

「私、名前、フォレル・シンラ。

フォレル、良い」

「な、何故に片言？」

「昔かららしい」

「……」

「ほらあんたも挨拶、挨拶」

「……」

黒髪の少女がライカに耳打ちした。

「大丈夫だつて！さあ、早く」

「わ、わた、私の」

黒髪の少女が名前を言いかけた時、集が突然頭をなで出した。

「ふえ？」

「そんなに怖がらなくても良いよ。

僕は君を拒絶なんかしたりしないから」

「…うん！私の名前はルーラ・ダークって言つの…！」

ルーラで良いよ…！」

「珍しいわね」

「確かに、ルーラが初対面の人には怖がらないとは」

「ねえ、集君だっけ？」

「はいそうですが？」

「何で君はあの時なでたりしたの？」

「何となく僕と同じような気配がしたから」

そういつた途端、集は顔を悲しそうに背けた。

「そう。深くは追求しないわ。これからよろしくね？」

「ええ」

「これで集も私達と同じ学校か」

「一緒にクラスになれたらしいな」

「そうですね。それでいつから何ですか？」

「ああ、今は長期休暇だから恐らく登校は長期休暇明けだな」

「そつか～楽しみだね！集…！」

「ですね。ルーラさん」

「もう！ルーラで良いよ…！」

「癖でね。まあ、一週間もすれば治るよ」

「そつか、じや、そろそろ帰ろつか？」

「だな。では集、帰ろつか」

「うい」

理事長室)

「ふむ。この子が例の」

「はい」

「で? どうだつたかな? 机上の空論の氷魔法は
「はい、実際戦つてみて応用性、破壊力ともに
目を見張るものがあります。しかし、まだ彼は発現させて
日が浅い為に威力にむらがありました」

「ふむ」

「それに試験が終わつた後、氣を失うほどまでに
疲労していました」

「そうですか。ですが将来性はあると」

「はい」

するとドアがノックされた。

「どうぞ~」

「失礼致します」

先程の六色の青年がやつて來た。

「相変わらずカラフルな髪の色ですね」

「そうですね。染髪してもすぐに抜けちゃいますので」

「それで、どうでしたか?」

「はい。過去の文献を徹底的に漁つたところ
やはりある時代の所で意図的に氷魔法の
文献が消されていました」

「そうですか。それでその時代は?」

「魔法革命時代です」

「そうですか…」

「どうなさいますか?」

「ん、今は観察という事にしておきましょ」
「分かりました。失礼致しました」

「如月集君か。楽しみだ」

その顔はまるで子供のよつたな純粹な笑顔だった。
実際子供の様な姿だが

「あ？」

「どうしましたか？理事長」

「いや、今子供と言われたよつた」

「氣のせいでは？」

「だな」

続く……

第3話 全てを凍らす者（後書き）

こんばんわ！ケンです！

いや～一次創作は難しいですね～

今日アクセス数確認したらまだ、51人でした
まあ、まだ連載しだして一日目ですからね～
これから増えて行く事を祈っています。
それよりも如何でしたか？

次回で集が学校に編入致します。

それでは、感想もお待ちしております。
さよなら～

第4話 初めての登校日

「」は学園の地下にある訓練場。

年中余程の事がない限り開いており

生徒が鍛練するのもっとも最適な場所である。

今この場所で一人の男女がいた。

ゆえと集である。

「ふむ。ではやってみる」

「ああ。行くぜ！！」

集が地面に手を置くとその箇所が徐々に凍り始めていき最終的に巨大な氷の花を咲かせた。

「つむ。前に比べるとムラもなくなつて威力も安定している。それに疲労も少なくなつた」

「そうか？」

「ん？何か不満なのか？」

「ああ、まだ何か足りない気がするんだよ

「何かとは何だ？」

「それがさつきから考えているんだが分からないんだ

「難儀な話だな」

「ああ。まあ、前よりも疲れもないし。

成長はしたかな？」

「そうだな。だが、まだ鍛練しないといけないぞ」

「ああ、次やうう」

集が言おうとした途端に訓練場のドアが蹴り破られた。

「おっはよーーーー！」

「おはよー」

「…おはよう…」

「おはよー」

「ああ、皆おはよう」

「おはよー」

「おはよー」

上からライカ、ルーラ、フォレス、ラナである。
「朝早くから熱心な事ね~」

「こうでもしないと力の意味が無くなるから」

「…言うとおり…同感」

「で?どうだつたの?集」

「うん。だいぶ前よりかは使い方は上手くなつたよ」

「そつか~ねえ、今度私と模擬戦しようよ!」

「ああ、そうだな。僕も一回皆と闘いたいな」

「ふふふ、力の差を見せてあげるわよ?」

「そんな事よりも「行くぞ。始業式が始まるぞ」

「「「了解」」」

「」」

「」」か~理事長室は

集は今大きな扉の前にいた。

「よし、失礼します」

「は~い」

集が入るとそこには小さな子供?がいた。

「理事長ですか?」

「つむ。私がこの学校の理事長だよ~」

「理事長!」

「あ、やばい！」

すると理事長は集の後ろに隠れてしまった。

「あ、あれ？ 集君、理事長知らない？」

「ええ、知りませんが」

「そう、ありがとう」

「もういですよ」

「ふうすまないな。君が如月集君だね？」

「はい。え～と本当に理事長ですよね？」

集は真下にいる小さな子に目線を合わせた。

「そりや……」

「ぐえ！」

突然、顎に頭突きを貰った。

「ふん！ 初対面の人にそれは無いのではないか？」

「す、すみません」

「まあ、良い。もう慣れたしな。さて、君のクラスなのだが

「はい」

「ああ、その前に言う事があった」

突然思い出したかのように言いだした。

「君の魔法なのだがね」

「はい」

「出来るだけ、使わない方がいい

「何故ですか？」

「君の魔法は氷だったね？」

「ええ、まあ」

「それは今の常識では有り得ない魔法なんだ。

まあ、昔は常識だったみたいだがね。

それに、今は不穏な動きを見せる輩もいるからね

「分かりました。出来るだけこれは使いません。
でも、誰かの命が関わってるときは使いますよ?」

「ああ、そこら辺の判断は君がするといいさ」

「はい、それでクラスは?」

「ああ、すまない。クラスだつたね。君には選ばせてあげよう
「へ?」

「実はなこの学校の入試・編入試験で優秀な成績を
取った者にクラスを自由に決める権利を与えているんだ。
そこで、君は史上初の全教科満点だ」

「まじですか?」

「おおまじです。何組が良いんだ?

ちなみに上から優秀な輩が集まっているぞ」

クラス表には全部で10クラスが書いてあった。

「…………だつたら僕は8組で」

「ふむ。何故だい?君の実力ならば
余裕で1組に入れるんだがな」

「何となくです。それに僕つてトップの
クラスつて嫌いなんですね」

「何でだい?」

「僕は自由に生きたいんでね」

「ふん。分かつた。では、君は8組の29番だ」

「分かりました。それで、担任の先生は?」

「ああ、担任は」

「私ですよ。集君」

そこにいたのは編入試験で戦つたフィーリ先生だった。

「フィーリ先生！」

「おはよう。じゃあ、行きましょうか？」

「はい！」

こうして集は8組に在籍する事になった。

「……出てきなさい。隠れてるのは分かつてるぞ

「おやおや、バレテしまいましたか。さすがは
ブリュンヒルデ
最強の乙女」

「たわけ。それは昔の名前だ。今は」

「か弱き乙女ですか？」

「分かつていいんじゃないか。第三位。で？何の用だ？」

「まあ、少し興味があるお話を

されていたので聞きたいと思いましてね。

それとその第三位という呼び方はよして下さー」

「ふん。まあ良い。だが残念だつたな

「そうですね。彼なら確実に1組に来ると思ったのに」

「私も安心しているよ。あんな人間とは思えない奴らのいる

1組に入らずに済んで」

「おやおや、えらい言われようですね」

「そうか？あそこは実力主義の馬鹿が集まるところだからな

「それは自分も同感ですね。貴族の在籍率が

この国ではトップの学校ですから」

この世界には貴族と呼ばれるものが存在している。

貴族はその昔、活躍した偉人達の血を

継いでいると言われておりその子孫たちは

かなり優遇されている。

しかし、その影で権利が暴走しており差別などが今日の問題となっている。

「私は貴族というものが嫌いでな。力もないひよつこ共がギャーギャー、親の七光で叫んでいるようにしか見えないんだがな」

「そうですね。下のクラスにも彼らよりも優秀な生徒はいますから。また、どの時代でもそういう咬ませ犬は存在していますから。しかし、そのお陰でこの学校も一躍有名となっているでしょ？」

「私は名声などには興味がなくてな。この学校は先祖代代ひつそりと受け継がれてきたものだ。今頃、ご先祖様は泣いておられるだろうな」「ふふふ、そうですか。まあ、考えは人それありますからね。そろそろ時間ですので私はこれで」

「ああ、その前に言う事があるぞ」

「何でしちゃうか？理事長」

「今年は気を付けた方がいいぞ。何せ彼がいるのだからな」「如月集君ですか…忠告として受け取つておきましょ」

「そういい少年は消えた。

「さて。この学校でどんな事をしてくれるのかな？異世界人パラドックス」

理事長はその顔を歪めさせ笑つた。

「じゃあ、私が言つたら入つて来て頂戴」

「分かりました」

先にフイーリーが入つていくと先程まで騒がしかつた教室が静かになり号令が響いた。

「おはよー、皆」

「　　「おはよー!」ぞこます!—!—」」

「はい。じゃあ、SHRを始めるわね。まずは皆

長期休暇はどうだったかしら?」

今日から心機一転してやつてこせましょうね」

「先生は男、出来ましたか?」

「…成績を十段階ほど落としておいつかしらね

「す、すみませんでした!—!—」

教室から笑い声が響いた。

「あの人独身だつたのか?
ちやつかり初めて知つた集だつた。」

「それよりも今日はビッグニュースがあるわよ
「もしかして先生が30代に入ったとか?」

「…来年は留年かしらね」

「す、すみませんでした」

「そうじやなくて今日は転校生よ—!—!—」

「　　「おおおおお!—!—!—」」

「こんな時期に転校生?」

「男かな?」

「男だつたら狙おうかな」

「じゃあ、入つて来て頂戴」

「そう言われ集はドアを開けて入つていいた。

「　　「—!—!—」」

その後、ゼロを通してクラスのみんなとは知り合いにはなった。
そして、始業式も終わり授業は明日からという事で
今日は午前中には帰宅となつた。

「ん~眠」

「おお、いたいた」

「ん? ゆえか」

「私達もいるわよ~」

ひょこつと皆が現れた。

「ねえ~集つて何組なの?」

「僕は八組だよ」

「ふ~ん。集なら上のクラスに行くと思ったのに」「どうも、上のクラスって好きじゃないんだよな」「ふ~ん。あ、ちなみにこここの皆は全員一組だよ」

「一組か。また遊びに行くよ」

「あ~それは辞めておいた方がいいわね」

「どうして? ライカ」

「一組…貴族…多い…差別…黙認…ひどい」

フォレスが片言で呟いた。

「ああ、この学校はこの国で
最も貴族の在籍率が高くてな」

「あいつらは一組の奴らには優しいけど」

「他クラスには平氣で魔法的にしたりとかするんだよ
ラナとルーラが補足した。

「ひどいな」

「ま、集なら問題ないだろ?」

「だと良いけど」

「心配…集」

「ま、今日は帰りましょ」

「そうだな」

「おい、見たか今の奴」

「ああ、見た」

「あいつ一組じゃないよな?」

「ああ、カスクラスの癖に我らの姫たちと対等に話している」

「これは報告だな」

後ろにその光景を恨めしそうに見ていた生徒に気付かずに。

第4話 初めての登校日（後書き）

「こんにちは！ケンです！！」

如何でしたか？

一時創作は難しいですね。

こんな作品をお気に入り登録してくださった

方には感謝です！！

感想もお待ちしておりますので。

それでは！！

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在

只今の時刻、朝の5：00。

「ん～よく寝た～さて、起きるとするか！」

桜ゆえの朝は5：00から始まる。

まずは、顔を洗い軽く歯を磨いた後
家の周りをジョギング。そして魔法の鍛錬を行つ。
そして、それを三十分で終わらせた後
剣を振るう。それを幼いころから続けてきた。
それを15分間した後は今日の
座学の予習を行う。

これが終わった時間に集が起きてくる。
この繰り返し。

「遅い。何故今日は集が起きるのが遅いんだ」
ゆえは居間でイライラしながら待つていた。

何故待つているのかというと集の鍛錬に付き合いつ為である。

集はまだ、細かい魔法の操作が粗いためそれを
鍛錬するのだが今日は遅かった。

「仕方がない。起こしに行くか」
ゆえは集の部屋へと足を運んだ。

「起きろー！集！時間だぞー！」

ドアを強く開けると部屋から冷気が漏れてきた。

「寒いな。仕方がない」

ゆえは全身に炎を薄くはると集に向かつて行つた。

案の定、集は気持ち良さうに涎を垂らしながら熟睡していた。

「やれやれ。起きる、集ーー！」

「つまーー！」

耳元で叫ぶと集が飛び起きた。

「鍛錬の時間だぞ」

「へ？ もうそんな時間？」

「ああ、とっくに過ぎてこな」

「行こうか」

「ああ

「集。その寝癖は何とかならんのか？」

「めんどくさいからしないだけだよ。始めよつか」

「ああ

いつして朝の時間帯はいつもして過ぎて行く。

「つ、疲れた

「やはりお前は細かい魔法が苦手だな」

「自分不器用ですかから

「不器用にも程がある」

「おっはよー」

「うお！ ライカ。頼むから朝から

タックルしないでくれ

後ろからライカが強烈なタックルをかましてきた。

「まあ、良いじゃない。で？ 学校生活はどうかな？」

「まだ、一日何だが」

「良いじゃないのよーせはしまはしまはしまはーー」

「朝…つるさい…ライカ…迷惑…頭…痛い」

「そう言つあんたはテンション低すぎるのよーー」

「いや、フォレスグーリーがちょっとこんだが

「え〜」

「早く行くぞ。遅刻するだ

「はーい」

「了解

「じゃあ、今日の連絡はお終い。授業頑張ってね」

フィーリー先生のS.H.Rが終わり次は集にとつて初めてとなる授業が始まろうとしていた。

「なあ、ゼロ」

「ん? どうかしたか?」

「授業つて何やんだ?」

「授業は、歴史、用法、実践、研究つて感じだな。一時間目はその内の用法だ。ほら、先生が来たぞ」「授業を始める」

キーンコーン、カーンコーン

「む。ここまでか。じゃあ、今日は終わりだ。宿題はさつき言った通りの場所だ。

くれぐれも忘れるなよ?特に!ゼロ!」

「は。はい!」

「今度忘れたならみつちつじてやるからな」「は、はい」

「つ、疲れた」

「全部寝ておいてよく壱ひつな。ゼロ」

「寝るのも疲れるんだぜ? な、後でノート見せてくれ

「良いけど、所々端折ってんぞ?」

「此の、良いの」

「なら、良いが

「さっすが集だぜ！トライ行こうぜ」

「ん。
分かつた」

「まあ、まだ今は基本事項しかしてないし俺達一年だし」

「そりだな。ん？あれは？」

集が見たものは一人の生徒が言い争つてゐる場面だつた。

「何で？」

「よく見てみろよ。あの胸の刺繡」

刺繍（さしふし）あれかど（あれかど）いたんた（いたんた）

卷之三

14

「おー、お前、」の俺にぶつかって何をあのつもりだ?」

「す、すいません」

「川口へ家の畠界はどこが、おいで

『詩經』卷之二

避けきれないくて」

「ああー!?」この俺がわざとお前などにぶつかつたとでもいうのか!

?

「な？ やばいだろ？」

「やばい」というか、ワルロスって奴名前にワルつてあるから

「お、お前！~~~~~！――わ、笑かすなよ」

我懷了你

「貴様分かつていないようだな。貴様そこで脱げ」

六

卷之三

「、兼です！」

「ほう。カスの癖に貴族の言う事が聞けないのか!!!」

バルロスは女子生徒に手を振り上げた。

「ナム」

「貴様、何の真似だ？」
「こつちが聞きたいね。貴族の男子が
か弱き乙女に手を挙げていいの？」
「ふん。そんな奴生きていても変わらないだろ？」「あ？ 何つた？」
「聞こえなかつたか？ 貴族でもない奴が生きていても
意味がないと言つているんだ！！」

お前らは所詮、親の七光で威張つてただけだろ？
お前は一体何をしたんだ！？何か人に
凄いといわれる事をしたのか！？ああ！？

「さ、貴様！？俺を侮辱する気か！？」

「侮辱だと？お前がこいつを侮辱したんじゃないのか？」

「貴様！？決闘だ！？！」

「！？！？」

「ああ、良い」

「待て！？集！決闘はよせ！？」

「何でだよ？」

「貴族は俺たちみたいな平民よりも
魔力の潜在量が強いって決まってんだよ！？」

「そんなもん誰が決めたんだ？」

「そ、それは」

「お前らはただ単に貴族が偉人の血を次いでいるからといつ
事で強いとか思つてるのか？」

「……」

「んな訳があるか！？」

「！？！？」

「貴族の全員が強い！？そんな訳あるか！？」

「貴族だから俺たちよりも強い！？」

「そんなもん誰が決めたんだ！？」

「ならば決闘を受けるのか？」

「ああ、上等だ！？受けてやる」

「ふん！後悔するなよ？」

決闘は明後日の闘技場で行う！－！

それまでに精々鍛錬でもしてろ！－！

ふはははははははははははは－！－！

「くそ！－！胸糞悪いな。大丈夫か、お前？」
「は、はい。ごめんなさい！－！」

「何で？」

「私の所為で貴方が貴族と闘う事になつて」
「別に良いよ。それにあんな雑魚に負ける気なんかしないし」

「で、でも」

「良いから。さつせと教室に行きなよ」

「は、はい」

そしてその時間は何も起らざり、一日が終わり放課後となつた。

「集！－！」

「ん、ゆえか。どうかしたのか？」

「どうかしたのかじやない！－！何であんな事をしたんだ！－？」

「あんな事？」

「今朝の事だよ。集つたら貴族を殴つてさうに決闘まで受けたんでしょう？学校中の噂になつてるよ？」

「ああ、そんな事か」

「そんな事が、じゃない！－！分かつてるのか！－？」

「君の今の実力は」

「うるさいな～」

「何！－？」

「決闘を受けたんだから俺はそれを受ける。

そして、あいつに勝つ！－！」

「だ、だが」

「いいじゃない。ゆえ」

「ライカ！－！だが」

「どうしたの？あんたらしくないわよ？」

「だが」

「大丈夫だよ－－きっと集は勝つよ－－ね？」

「当たり前だ－－絶対に勝つてやる－－」

ゆえ side

ゆえは自室で考へていた。

「なぜ私はあの時、あそこまで必死になつて集を止めたんだ？集が怪我をするからか？いや、集は確かに強くはなつている。だが、その強さは平民の中であつて言つ事で、いや、だが貴族とも…あ～もづ。分からん」考へれば考へるほど泥沼にはまつていつた。

「ゆえちや～ん。」飯出来たから降りておいで～」

「は～い。ま、良いか」

「ご馳走様でした」

「は～い。美味しかったかしら？」

「はい！とても美味しかつたです！－！」

「ふふふ、ありがと。食器は置いておいていいわよ」

「はい、ありがとう！」それこます！－！」

「集、少しいいか？」

「あ、悪い、ゆえ。寝る前で良いか？」

「あ、あ別に良いが」

「悪いな」

そう言い集はどこかへと出かけてしまった。

「最近、集君食事が終わったらすぐどこかに行くわね」

「え？ それって本当？ お母さん」

「うん。 だつて昨日も食べた後に出て行つて
帰つて来たのは夜遅かつたかしらね～」

「そう… ありがとう。 ご馳走様でした」

「はい」

ゆえがシャワーを浴び終わり場行の復習が
終わった時間になつても集は帰つていなかつた。

「あ、 しまつた。 教室に宿題を忘れた。
仕方無い。 取りに行くか」

「あつた。 あつた。 これが無いと宿題が
出来ないな。 ん？」

ゆえが帰ろうとしている時に地下鍛錬室の
明かりがついている事に気がついた。

「こんな時間に誰が？」

ゆえはつけ放しかと思い確認しに行くとそこには…

「集？」

集が一人で鍛錬をしていた。

「はあ、 はあ。 まだだ！！」

集は立ち上がり炎の魔法を放つが出した途端に
炸裂し、 炎が辺りに拡散された。

△ 憎い威力だな。 初級魔法でありながら

ここまで威力を出すとは。

だが、 やはり細かい作業が苦手のようだな

「またか～：次やるか！！」

集はまた立ち上がり鍛錬を一人黙々と続けた。

「頑張れよ。集」

ゆえは敢えて集には声をかけずに気付かれないように
鍛錬室から抜けた。

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在（後書き）

こんばんわ、ケンです！！！

如何でしたか？

感想もお待ちしております！！

それでは！！

第6話 初めての模擬戦、

「ん~…やべえ!! 寝過ぎた!!」

集は鍛錬の時間を大幅に過ぎた時間に起きた。

何せ昨日は細かい作業の鍛錬をしていたら

気付いたら日付が変わる寸前だった為慌てて帰り寝たのは良いが
結果はこれだ。

「やばい、やばい!! ゆえに怒られる…」

集は慌てて階段を降り居間に入った。

「悪い!! ゆえ!! 寝坊した!!」

「ん? 集か。まだ、6:30だぞ? 学校に行くには
速い時間だぞ?」

「へ?」

予想とは違いやえは満面の笑みで集を迎えた。

「い、いやだから鍛錬は

「ああ、鍛錬か。あれは曜日毎にじょいつ

「曜日毎に?」

「ああ、今日は休みにして明日にじょいつのだが?」

「あ、ああ。そうさせてもらひつ」

「じゃあ、まずは顔を洗つてきたり? 集君」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「珍しいわね。ゆえちゃんが人を気遣うなんて」

「か、母さん!! 人を鬼のように言わないでよ…」

「あらあら。そこまで反応するなんて、もしかして集君の事が」

「集!! やはり鍛錬をするぞ!!」

「はーーー?! ちよ、ちよっと待て…今せつせつ今日は休みだつて…」

「!」

「前言撤回だ！！鍛錬は毎日してこそその鍛錬だ！！

行くぞ！！決闘は明日なのだぞ！？」

「へへい。ようやく寝れるとthoughtたのに」

「なんか言ったか！？」

「い、いえ何もありません！..」

ゆえは顔を赤くしながら集を掴み出て行った。
「でも、本当に変わったわね～ゆえちゃん。

これも集君が来てくれたおかげかな？」

母は嬉しそうに顔を緩めた。

「で？今日は何をするんだ？」

「今日は私と模擬戦だ」

「了解」

「準備は良いか？」

「ああ、いつでも」

辺りに一瞬静かな空気が流れるがその空気は
何かが爆破するような音で碎かれた。

「せい！」

「うお！」

何とか避けたが髪の毛が何本か抜けた。

〔何だ今の？何かが爆発したような音が一瞬
した後、ゆえが目の前にいて、そして殴られた〕
集はいったん距離を取りながら考えた。

「さあ、次行くぞ！..」

〔つまりあの音がしたら伏せればいい事！..〕

そして音が一瞬聞こえ、ゆえが消えた。

「喰らうか！..」

集が伏せた瞬間、何かが通り過ぎた感じがした後に連れて放たれた炎に飲み込まれてしまった。

「たわけが。一度も同じ技を連續で使うと思つか? 使えば使うほど技は相手に慣れを与え避けられるものだ」 ゆえが言い終わった瞬間、炎が急に鎮火した。

「危なかつた」

「ギリギリで自らを凍らして炎のダメージを無くしたか」

「いや~ほんと危なかつたよ。昨日までの僕だったら確実にやられてた」

「ほ~昨日の自分よりも強いと」

「ああ。それと余所見は禁物だ。ゆえ」

「な~」

ゆえが言いかけた瞬間、上空から氷柱が何本も落ちてきた。

「」の前の僕は体に触れている部分でしか凍らす事は出来なかつたけど、今は触れていない部分でもある程度の距離は遠くの物も凍らせるようになつた

「どうか。それは喜ばしい事だ。だが、この程度で私は倒せんぞ」

氷柱から火柱が立ち氷柱を一気に水へと変えてゆえが現れた。

「ああ、そう思つてるよーー!」

集が腕を前に出すと

冷気が放出されゆえも炎を放出し防いだ。

「こんなものなの? お前の力は! ?」

「んな訳ねえだろ! !」

集はさらに腕を振るい凍らしていくがゆえはそれを魔法も使わずに全て避けていった。

「可笑しい。何故さつきから同じ攻撃ばかりしている」

先程から集は空間を叩くようにして凍らしていくが

先程から何度も避けられているにもかかわらず同じ攻撃をしていた。

「同じ攻撃ばかりして勝てると思つてゐるのか！？」

「さあね？」

「ならばなー！！！」

ゆえが言いかけた時何かにぶつかつた。

「これは、氷？…まさか！？」

ゆえは慌てて周りを見渡すが既に

周りは氷山の様な氷により回避場所が無くなつており

ゆえは氷に囲まれ逃げ道が無かつた。

さらに大部分が水びたしになつていた。

「何もなしに同じ攻撃ばかりする訳ねえだろ！？」

突然、地面から全体に電気が流れ込んできた。

「うぐーーまさか、この為に同じ攻撃で氷を作り逃げ場をなくしていたのか」

「そうだ！！」

「！！！」

見上げると集は空中に飛んでいた。

「さあ、終わりだ！！」

集は逃げ道のないゆえに向かつて腕を振るい氷の魔法を最大威力で放つた。

「残念だが終わるのは君だ」

「????？」

ゆえが地面を強く蹴ると円状に炎が展開していく部屋全体を覆うほどの巨大な火柱をたてた。

それにより全ての氷は溶かされ集は空中にいるので回避ができずに直撃した。

「はあ、はあ、はあ」

「私の勝ちだ、集」

集の首には刀が当てられており

周りにはいつでも攻撃できるように炎が揺らめいていた。

「負けました」

「あ、疲れた」

「当たり前だ。あれだけぼこすかと魔力の残量を考えずに使えば切れるに決まっているだろ？」

「ん~つい意識から飛んでしまうというか」

「は、そんな事で勝てるのか？明日の決闘に」「あんたとあんな奴を比較したらダメでしょうが

「ライカ！」

後ろからライカが話に割り込んできた。

「おはよ。にしても傷だらけね、集」

集の全身には包帯が巻かれていた。

「ん、まあね~。じゃあ、僕はこっちだから

「ん。また放課後ね~」

集は一人と別れ教室へと向かつて行つた。

「ねえ、ゆえ」

「何だ？ライカ」

「あの時の魔力からしたらあんた外さなかつたのね？」

「ああ、外したらあいつは

「だったら」

「でも、如月集君の実力が見たいんですよ。

一組に入れる実力を持ちながら敢えて八組に行つた彼の実力と魔法をね」

「残念だが集君は君の見たがつている氷は使わないぞ？」

「でしょうね。しかし、それだけが彼が一組に入る理由ではないんでしょ？」

「……」

「勝手ながら私はあの編入試験の様子を見させていただきました」

「は～何度言えば分かる。あれは教員以外閲覧禁止だぞ」

「まあ、そこは置いておいて率直に思ったのは異常ですね」「異常？ 彼が？ 貴方達の様に？」

「ええ。彼のあの攻撃の避けはもはや、天賦の才能でしょう。

恐らくこの学園で一番、効率よくかつ疲労が少ない
避け方でしたよ。あんな芸当は恐らく我々でも無理かと」「…それで」

「後は応用性です。発言した直後というものは
どのように使うかがあやふやですが彼は違つた。

発言直後のあの、氷柱による接近は初心者とは思えないですよ。
まあ、まだ素人なので負ける気はしませんがね」

「ほ～そこまで気付いていたとは、大したものだ」

「これでも伊達に第四位をさせて頂いていますから」

「あの～そう言えば何ですがランカーって

全部で十人ですよね？」

「ああ、そうだが」

「でも、分かつてるのはたつた数人ですよね？」

「ええ、皆シャイなんでしょうね」

「それだけなんでしょうね？」

「 もあな。とにかく明日の決闘は決行だ！！ 異議は認めん！！」

第6話 初めての模擬戦（後書き）

「こんばんわ！－ケンです－！」

如何でしたか！？

つくづく自分の文才の無さを感じさせられますね。

他の方の作品を見ている時は特に。

感想もお待ちしております！－

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088y/>

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

2011年11月23日16時48分発行